

“ポジショニングの有効性”について

第54回日本母性衛生学会・学術集会で発表されました。
(2013年10月4日(金)・5日(土)埼玉開催)

正期産新生児に対する ポジショニングの検討

名古屋第一赤十字病院

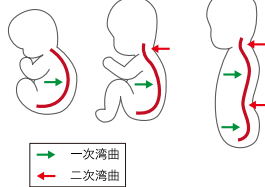
白木和希子 日高真由子 柴田幸子
木全美智代 真野真紀子

はじめに

- ▶ 早産児において、発達ケアの観点からポジショニングを導入している施設は多く、先行研究も多い。しかし正期産新生児を対象とした研究は少ない。
- ▶ 新生児の脊柱は、強く後弯しているため平面で寝かせることは不快であると考えられる。
- ▶ 正期産児では、子宮外の生活にスムーズに適応できるといわれているが、実際は児の啼泣に母が困っているケースも多い。

胎児 幼児 学童

ポジショニングによって、安静保持し睡眠を増加させることについて有効であるのかを検討したので報告する。



当院の概要

- ▶ 総合周産期母子医療センター：母体胎児集中治療管理室 MFICU9床 後方産科病床40床
- ▶ 年間分娩件数：約1400件
- ▶ 正期産分娩数：約1000件
- ▶ 産婦人科医師：16名 助産師：80名
- ▶ 分娩直後より母児同室。母親希望にて新生児室で児をお預かり。



方法

調査期間	2012年9月～12月
対象	妊娠経過、分娩経過に異常なく出生した新生児60名(妊娠37週以降、体重2500g以上)
場所	室温25℃、湿度50%の騒音の少ない新生児室(図1)
条件	全身状態に問題がない、おむつが汚れていない、授乳後2時間以内の空腹ではない状態。
手順	1) 啼泣時に、条件を確認し児をバスタオルにくるみ、落ち着かせる。 2) 平面のマットレス(図2)とポジショニング専用マットレス(図3)に仰臥位で寝かせ、5分後、15分後の児の意識状態をState6段階のスケール(図4)を用いて評価する。
分析方法	5分後、15分後、ポジショニング群と平面位群でState値の差をマンホイットニー検定にて分析する。



図1 新生児室



図2 平面マットレス



図3 ポジショニング専用マットレス

図4 State6段階のスケール

	児の意識状態、運動
State1	深い睡眠：規則性呼吸、自発運動なし
State2	浅い睡眠：閉眼、僅かな自発運動
State3	まどろみ：目は半ば開閉
State4	覚醒：開眼、僅かな自発運動
State5	はっきり覚醒：活発な自発運動
State6	啼泣

結果

▶ 5分後の2群のState値の比較

ポジショニング群の方が平面位群よりも啼泣している児が少なく有意差がみられた。
(p 値 $0.02603 < 0.05$) (図5)

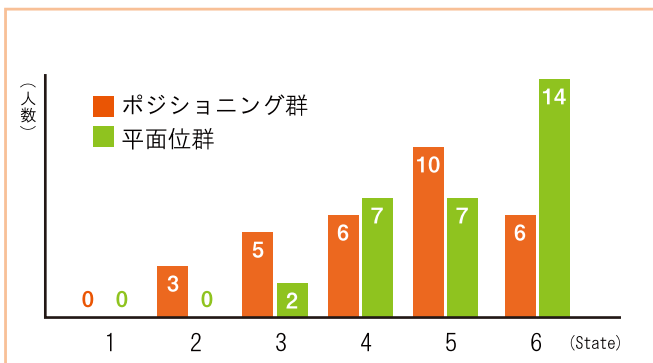


図5 5分後における2群のState値の比較

▶ 15分後の2群のState値の比較

ポジショニング群の方が平面位群よりも睡眠の状態にある児が多く有意差がみられた。
(p 値 $0.000141 < 0.05$) (図6)

ポジショニング群ではState1・2が増大し、睡眠時間が継続された。

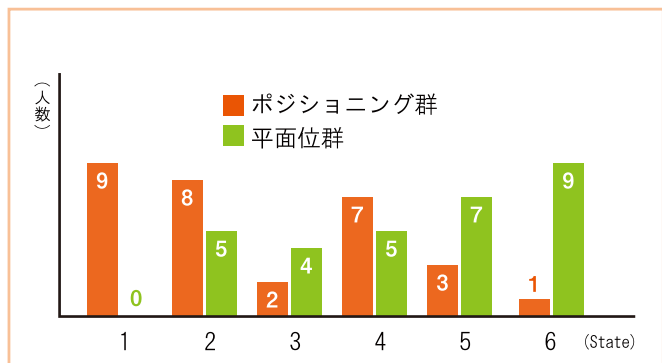


図6 15分後における2群のState値の比較

考察

- ▶ 正期産児は安定した覚醒が多くなる一方、全身状態が安定していても、中途覚醒時には、ストレスを伴う啼泣が出現し、睡眠・覚醒状態の調整に困難さを伴う時期であるといわれている。
- ▶ ポジショニング専用マットに寝かせることで、胎児様の屈曲姿勢をとることができ、Stateの安定につながった。

- ▶ ポジショニングを用いて睡眠を促すことは、安定した睡眠への支援のため重要であると考えられる。
- ▶ 児の睡眠・覚醒のサイクルができることで、ずっと泣いているという状況は減少し、母の育児ストレスの軽減にもつながると考える。



結論

- ▶ ポジショニングは早産児同様、正期産新生児に対しても睡眠の増加、安静保持に有効である。

今後の課題

- ▶ 児の睡眠・覚醒状態の評価をStateのみで調査しているが、その他様々な児のストレス・安定化サインを測る指標を用いて評価することで、さらに信頼性、及び妥当性を高められると考えられる。
- ▶ ポジショニングマットを用いて、児の睡眠を促すことで母の育児負担の軽減へつながると考えるが、実際に現場で、母の声の調査までは至っていないため今後検討していきたい。